

野菜屑を利用した養豚飼育

赤磐郡山陽町馬屋

石原金吾

私は昭和25年、3反3畝(33a)のわずかな分け地をもらって分家し農業を始めました。家も自分で建てたため全く無一文のようなすがたで出発したのであります。当時の実情は全く言葉で言いつくせない苦勞の連続で全く言葉で言いつくせない苦勞の連続で、私は農業だけで食べて行くにはどうすればよいかと、日夜悩みつづけたのであります。その時隣部落の篤農家「小倉政一」先生より、百姓には必ず畜産が必要であることを教わり、自分の努力次第でどうにでもなる畜産を取り入れることによって、人並みの経営が出来るのではないかと悟り、畜産の導入を計画しました。たまたま26年豚の価格が非常に安くなり、仔豚の販売に困っている近くの農家から1頭の仔を買うことができ、これをもとにして私の養豚飼育が始まったのであります。

この豚は昭和27年秋11頭の仔豚を分娩しましたが、養豚の知識も技術もない私は2頭しか育てることができませんでした。しかし一度渡りかけた橋は必ず渡らなければならないと決心を新たに、種畜場に通り技術の向上に努力しました。さいわいなことに、その後は豚の価格に大きな変動がなかったため、私の養豚飼育も軌道にのり33年には畜産の所得が全体の52%にまで高まってまいりましたが、その大部分は養豚収入であります。

さて、養豚はこのように、私の経営では重要な位置を占めるまでに発展して参りましたが、養豚収支を見ますと、所得に対して飼料費が半分になっています。このことは価格の変動の多い養豚では一番に考えなければならない問題ですが、特に私のような経営では受ける影響が大きいわけです。そこでいかに価格が安くなっても心配なく飼育できるような安い飼料費でなければ有利にいかないと考え、先ず隣部落の大原から、野菜屑を無償で貰い「第4表」のような割合で給与しました。しかし私の計画は期待した程成果をあげることが出来なかったのであります。これは第1表に示してありますように、成長速度がおそく飼育期間が

1ヶ月~1ヶ月半も長くかかったため、飼料費は余り変らなかったのです。そして野菜屑を飼料化するためには、次のような点に問題があることに気付きました。

先ず第一に食いつくしが多く、不消化のものが糞の中に多量出ていることです。この対策として、野菜屑を細切りしたり、細切りしたものを濃厚飼料と一緒に混ぜ煮て与えること等調理に工夫してみましたが、その効果を確かめることはできませんでした。

次に成長速度が遅いという問題ですが、栄養分が不足勝になっていたことがわかりました。特に仔豚から中豚にかけての発育が遅く、中豚から成豚にかけて肥りが少なく、これは豚の状態に応じた飼料の給与法が行われていなかったことです。

このような問題を改善するために33年度においては、次のような計画を立て実施してきました。

先ず採食量を増やし消化を良くするためには、野菜屑をうんと細かくし食べやすい状態にして給与する計画を立てました。その方法として、家庭用電気ミキサーからヒントを得て飼料用ミキサーを考案しました。(1,760円かかりました)このミキサーは古い精麦用臼を利用したもので、特徴はチョッパーや、すり潰機と異って、葉菜類も根菜類も同時に調理出来ることですが、水を加えなければ使用できないところに欠点があります。ミキサーにかけた野菜屑は濃厚飼料に混合して煮て与えましたが、嗜好性も改善され、採食量も2~3割増加しました。次に豚の状態に応じて栄養分を充分とらせるために、32年までのような飼料のめくら給与を止めて、飼養標準により豚の状態に応じて野菜屑の給与を変えて行きました。

この結果は2表のように仔豚から中豚にかけての発育は改善され、飼育期間も半~1ヶ月程度短縮されるようになりましたが、中豚から成豚にかけての肥りは思う程に改善することができず、出荷時期がやや遅れ勝ちになっています。これを飼料費の方から見ますと2割程度も節減されております。ミキサーを考案したことで、飼養標準に基いて合理的に飼料給与を行っ

岡山畜産便り1959.03

たことで改善の効果が確認されるのではないかと考えられます。

以上のことから、野菜か青草を利用する養豚は充分成り立ち、3反百姓でも結構食べて行ける確信が持てるようになりましたが、その成果をあげるためには、まだまだ問題が残されていると思います。

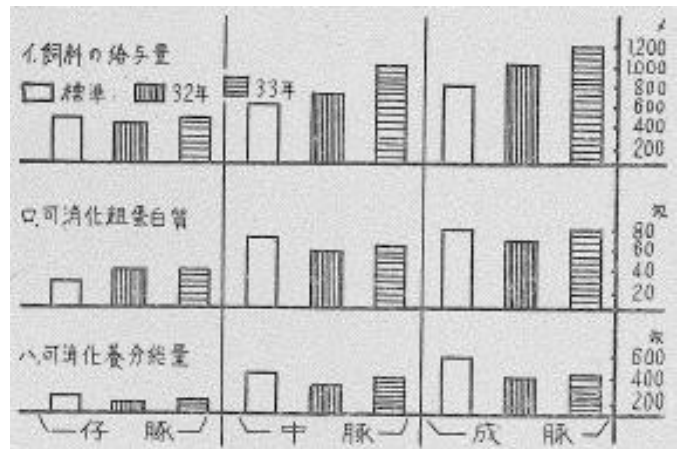
その一つは、ミキサーにかけたものを加工することによって、嗜好性と栄養価値を高めることが可能ではないかということです。最近飼料の加工貯蔵の方で、やかましくいわれている醗酵処理法を取り入れる計画であります。次に仔豚から中豚にかけての発育を促進するためには、繊維の少ないこと、良質の蛋白質を多給することが条件になってきますので、ラジノクロバーを主体とした牧草類を畦畔や宅地等の空閑地に作つけするよう計画しております。また、もらった野菜屑だけでは時期的に見て、どうしても栄養分の釣合いがとれにくいので、家の田を上手に使って、補給できるような輪作を取入れなければならないと考えて養豚収支内容

区分	年次	昭和32年	昭和33年
肉豚販売収入		75,440円	53,800円
内販売頭数		6頭	4頭
内総体重		128貫	97,800貫
内平均体重		21,300貫	24,400貫
内1頭当価格		12,570円	13,400円
仔豚販売収入		23,000円	23,500円
内販売頭数		7頭	8頭
内1頭当価格		3,300円	2,900円
未販売豚		39,000円	104,200円
	繁殖豚	35貫	繁殖豚 50貫
		15,000円	20,000円
	肥豚	40貫	肥豚 21貫
		24,000円	74,000円
			仔豚 4頭
			10,000円
計		137,400円	181,500円
仔豚代金		18,000円	12,000円
肉豚飼料費		38,000円	57,000円
1頭当飼料費		6,300円	5,400円
繁殖豚飼料		8,000円	12,800円
計		64,000円	81,800円
差引		73,400円	99,700円

おります。特に中豚から成豚にかけての肥りの悪いのは、脂肪になる養分総量の補給が、野菜屑だけでは充分にいかないの、澱粉質の根菜類を主体に考え、本年度はこの甘藷や馬鈴薯の澱粉質作物の栽培計画を立てております。

以上のように、養豚は野菜屑より、経営内で飼料を生産する方向に発展して参りましたが、自給飼料を中心とした飼育法は、地区の人々にも次第に認識されるようになりました。私達の高月農協が33年度、中小農に対する畜産振興の事業として始めた豚の預託事業推進のため成された養豚部会で、34年の事業計画の中に、畦畔や空閑地の牧草導入や輪作による飼料作物栽培が、重要な事業として取り上げられております。私は養豚部会の一員として、前に申し上げました計画を遂行することによって、如何なる不況な時にも採算の合う養豚に発展させ、地区の養豚振興のために協力できるよう努力したいと思っています。以上

飼料の給与量と養分量



豚の発育比較表

